

現象学の探究プログラム化^①

—現象学の再立ち上げをめぐる—

稲垣 諭

はじめに—現象学は何を行なってきたか？

フッサールによって創設され、開始された「現象学」は、一個の哲学的立場の宣誓ではない。そもそもそれが、歴史哲学上に配置される立場や観点の単なる宣誓であれば、一時の隆盛を経て忘れ去られていくだけである。戦後、夥しく日本に輸入されたヴェンデルバントやコーエン、リッケルト、ナトルプを代表とする新カント派による研究書は、今まさにその憂き目に会っている^②。彼らは、同時代に出現した現象学という思考を共に進めたというよりも、例えばカントの哲学的立場を歴史的に再確認し、それを固守するための正当化の議論を好んで行ったからである。しかしでは、それに対して現象学は何を行ってきたのか。ハイデッガー、メルローポントイ、デリダ、アンリ、レヴィナスといったフッサール以後の現象学者の中で、フッサールの立場を固守した者はいない。誰もがフッサールのやり方では十分ではないと感じ、それぞれが全く異なる現象学を展開しただけである。外的に見れば、フッサールの現象学を裏切り続けることが、現象学を行うための必要条件となっている。したがってまた、何か確固たる「現象学」が存在す

るでもない。むしろ、それぞれの現象学者が、現象学という言葉にどれだけの内実を込めて新たに語り直すことができるのか、そこからどれほど新たな現象領域を開示できるのかが問題の焦点となっている。

この点において現象学は、現代哲学の一学派であると同時に、単なる哲学の枠内には納まらないふところの深さを暗示している。ただしこのことは逆に、現象学が、哲学内部での独特の優位性をもつという思い込みを生み出すと同時に、そう簡単には自らを哲学外部へと拡張することができないというジレンマをも生じさせる。そもそも、フッサールやメルロ・ポンティのテクストを丹念に解読し、体系的もしくは年代記的にまとめ、統一的なストーリーを描きだすことは、テクスト読解の訓練を積み重ねればそれほど難しいことではない。むしろ問題は、そうしたことが必ずしも現象学的な営みとは呼べないことにある。つまり、ある現象学者もしくはその現象学的立場について記述される「非現象学的な」研究が、「現象学的な」研究と同時に存在してしまうのである。

しかしでは、そもそも現象学的な探求と非現象学的な探求の区分は、どのようにして行われるのか。本稿は、現象学を「探究プログラム」として設定することで、上記の問いに答える道筋のひとつを提起してみたい。プログラムの核心には、『「事象それ自身」の開示において前進していく^①』ことが無条件的に含まれており、この前進とともに現象学的な「経験の可能性の拡張^②」が行なわれねばならない。この可能性の裾野を広げることには貢献できるかどうか、学としての現象学を展開するための試金石となる。このプログラム化とともに現象学の「科学性 (Wissenschaftlichkeit)」が改めて浮き彫りになるはずである。そのことがさらには、脳神経科学や認知科学といった探求領域が重なる経験科学や、意識や身体に障害を抱えた人々の治療にあたるリハビリテーションといった実践的な臨床フィールドと現象学との相乗効果的な接合点を作り出すとも予想している。

1. プログラム的発想の必要性―反証主義と探究プログラム

現象学をプログラムとして考察するに先立って、「探究プログラム」という発想が生まれた科学哲学的状況を簡潔に概観しておく。そもそもプログラムという語は、日常的にも頻繁に使われるように、物事が進行するための実行計画であったり、コンピュータが演算処理を行なう際の手順を示す規則のネットワークであったりする。現在、経験科学の多くが、この発想を取り入れているのは、参加者がそれを共有し、吟味し、改良し、展開できるからである。プログラムという発想には、探求の「共有可能性」、「吟味可能性」、「展開可能性」が必然的な格子として含まれている。

このプログラムを経験科学に取り入れることを提案したのは、ポパーの弟子であるラカトシュであり、それが「探究プログラム (research program)」と呼ばれる。ポパーの「反証主義 (falsificationism)」は、科学理論の普遍性を放棄しつつ、経験科学の内実を「新たな発見を促すかどうか」、つまり「理論構想が将来にわたり展開可能であるかどうか」を問うことだけに限定した。科学者は、展開見込みがない理論構想を自由に捨て去り、別の理論構想を選択できる。科学の発展にとってはこのことだけが推奨されるべきであり、生涯にわたって同じ理論や立場を繰り返し主張するのは「信仰」ではあっても、「科学」ではないということである。

反証主義は、一切のドグマ的、絶対的理論を断固拒否する。つまり、理論は常に仮説であり、仮説は経験によるテストを通じて修正されねばならない (可謬主義 falsitism)。可謬性をもたない理論は、それを承認する人々の間でだけ流布し、膠着し、停滞するドグマとなる。一部の人だけが信奉する絶対的理論は、展開不可能になった場合でも、絶対的という理由から捨て去られるという選択肢をもてない。したがって、理論が展開可能性をもつためには、それ

が修正されうる余地も同時にもたねばならない。これはポパーの優れた洞察である。しかし他方、一切の知識が誤りうるという主張は、極端な懐疑主義を容易に呼び起こしてしまう。もともと仮説を検証・反証するための観察データそれ自身が理論的負荷を帯びざるをえないことから、絶対的な検証・反証もありえず、懐疑的側面はより増長されていく。^⑤ ラカトシュは、素朴な反証主義が抱え込むこうした困難さにいち早く気づいていたし、科学史上の発展を見る限り、反証主義者がいこうほど科学の展開がスムーズには行われぬこともよく知っていた。そこで編み出されたのが探究プログラムである。探究プログラムは、「ドグマ主義」と「相対主義」のはざまで、その両者に陥ることなく、次々と展開可能な探究課題を見出し、構想され続けねばならない。^⑥

探究プログラムの構成ユニットを確認する。プログラムには、そのプログラムを共有する研究者によって反証されるはならないコアが存在する(堅い核 hard core)。これはプログラムを推進させるための探究指針である。ポパーの反証主義は、既存の仮説をテストにかけ、その仮説を順次放棄すると同時に「より大胆で新たな仮説」を次々と産み出していくことをモットーとしていた。とはいえこの主張には、どのようにしてより大胆な仮説を提起すればよいのかについての手がかりが存在しない。しかも多くの科学者にとって、自分の着想を放棄することはそう容易ではなく、事実画期的な発見にたどり着いた科学者のなかには、周りから反証証拠を突きつけられようとも自説を放棄しなかったために偉業を成しえたものが少なくない。^⑦ そこでラカトシュは、コアユニット自体は反証不可能でも、それを探究の指針にして新たな仮説や手続きのネットワークを順次展開できるのであれば、単なるドグマ主義に陥ることはないと考えたのである。

こうしたコアの例として、「太陽は地球の周りを公転する」という天動説の命題を設定してもよい。もしこのコアを反証するような経験的状况が出現した場合、プログラムの参加者はそのコアを守るための「補助仮説」を提起する

必要が出てくる。たとえば惑星の逆行を説明するために、その惑星に固有な運動軌跡としての周転円を導入することも仮説のひとつである。これら補助仮説の集合が防衛帯 (protective belt) というコアを守るネットワークを形成し、それが吟味・反証のプロセスにかけられる。防衛帯を構成する仮説は常に代替可能であり、それが反証された場合には、新たな補助仮説を順次構想することによって、コアユニットを維持するよう努めればよいのである。事実、プロマイオスの天動説は、コペルニクスの地動説が現れ、反証証拠が増え続けた後も一五〇年以上はプログラムとして機能し続けた。

コアユニットの反証不可能性がこのように堅持されるのは、たとえ反証証拠が挙げたとしても、そのコアプロジェクトが展開可能である限り、それを放棄する理由はないからである。ただし、コアがもつ意味はあくまでも、事実世界はそうなっているということを固辞し、正当化するためのものではなく、探求の展開を方向づけるものとして理解されねばならない。またその限りで探究プログラムの実行者は、その観察者とは異なり、科学的实在論や反实在論といった立場をめぐる正当化の論争に拘泥する必要もない。重要な点はただ、コアユニットのもとで、いかに新たな現象領域を予測し、開示できるのか、そのための防衛帯をいかに発見的に見いだし、創造的な理論を構想できるかにかかっている (肯定的発見法)。^⑧ ただしラカトシュ自身は、固有のプログラムを実行したというより、観察者として「探究プログラム論」を考案しただけである。つまり彼の探究プログラムは、科学のこれまでの歴史および科学的営みに合理的説明を与えることを目的として構想されたというのが実情である。そのためプログラム論は、厳密な反証基準をめぐる論争や、停滞したプログラムの放棄基準をめぐる論争、コアの選択は規約か決意かといった立場をめぐる論争に巻き込まれた後、現在ではほとんど活用されてはいない。その意味でもプログラム論自体がプログラムの構想されていなかったのである。^⑨ したがって現象学を新たにプログラムとして設定し、現に実行可能なところまで

仕上げるには、ラカトシュの形ではほとんど間に合わず、多くの作業仮説を用いた工夫が必要になる。

現象学という学の出目から、それが深化していく経過には、経験科学批判という役割が強く根づいている。そうした歴史を無視して、批判されるべき経験科学に親和的な発想を現象学は容認するのであるか。ここで改めて思い起こすべきは、現象学は何らかの立場や観点を標榜するものではないということである。その意味でも現象学は、経験科学に反対する立場のことではない。そうではなく、現行の経験科学が取り扱えていない経験の場をそのつと特定し、そこに記述を与えることで探究課題を持続発展的に開示するのが現象学である。ということとは、現象学から経験科学への批判とは常に、経験科学者の探求を前進させる手がかりとなるような、固有な経験に裏打ちされた批判でなければならず、さらには、そうした経験科学の成果を現象学自身の展開のために取り入れることを見越した上でプログラム設定が行なわれねばならない。さもなければ現象学研究は、プロパーだけからなる専門化した固有領域に自閉し、停滞する。そこで次節以降、プログラム化のための最低限の枠組みを提示し、進めるところまで構想を広げてみる。

2. 現象学の原理設定

プログラムには、探究の指針となるコアが必要である。このコアに相当するものは、伝統哲学的には「原理」と呼ばれてきた。例えばそれは、世界や事象を説明するための枠組みや法則（事象原理）であったり、探究に一定の方向性を与える指針（探究原理）であったりする。「物質の最小単位は原子である」や「閉じた系のエネルギー総量は変化しない」といった原理は前者にあたり、「自然は無駄をしない」や「まだ見ぬ経験はこれまでの経験と類似する」といった原理が後者にあたる。事象原理は、世界そのものの成り立ちに説明根拠を与えるものであり、そのため経験科学では何らかの仕方、その真偽が判定されねばならない。それに対して探究原理は、現実世界で真偽を判定する

ことはできないが、探究を進める際の大まかな指針となる。精密自然科学は、このように「事象原理」と「探究原理」が組み合わされたコアユニットとともに、新たな現象を予測・発見する仮説を提起し、その現象に固有な法則的説明を与えることをプログラムの使命としている。

それに対して現象学におけるコアとはどのようなものか。多くの現象学者が語ることのひとつに「事象それ自身へ」というモットーがある。このモットー自体は何を述べているのか。そもそも事象が何であるのかが分かっていれば、それへと向かう必要はない。またこれまで、「事象が何であるのか」を確定できた現象学者も存在しない。ということとは、事象それ自体は最終的に確定されえないものである可能性が高い。もし事象が最終的に明示されないとすれば、明示できないものへとどのように向かえばよいのかも一義的には決まらない。実は、事象のこの最終的な明示不可能性が、現象学の駆動力を生み出している。つまり、それぞれの現象学者が事象という概念のもとでどのような経験をするのに応じて、事象の内実がそのつど変化し、それへの接近方法が発見され、改良される。そのことが当人の体験様式を拡張すると同時に、それに沿った記述スタイルの確立を導く。そうして一個の現象学的プログラムが出現するのである。

改めて問いを立ててみる。なぜそもそも「事象それ自身へ」回帰せねばならないのか。何をすれば、「事象それ自身へ」と回帰することになるのか。こうした問いかけによって多くの解答の選択肢が出現する。例えばフッサールにとっては「諸学問の基礎づけ」という解答が、ハイデッガーにとっては覆い隠されてきた「存在の問いの開示」という解答が用意されていた¹⁰⁾。さらにまた、なぜ「諸学問の基礎づけ」を行う必要があるのか、というように問いを進めることもできる。これに対しては、「経験科学の実証性をより確実なものにするため」、「失われた主観性を絶対的明証性に照らして主題化するため」、「誤解され続けた認識論の正当性を回復するため」等々、さらに多くの選択肢が出

現する。そしてその選択肢はそれぞれ、その問いへの「近さ—遠さ」という度合いをもつ。なぜ「事象それ自身へ」
① 帰帰するのかわという問いに、「明日のわが身を案ずるため」と答えても、事態が展開する見込みがないのは誰にでも
分かる。ということは、「事象それ自身へ」というモットーの中に既に、経験とともに問いを進めるための選択肢を
制限する、ある種の統制力があることになる。プログラムの実行者にとって、なぜ現象学者のテキストを読み込む訓
練が必要になるのかといえ、それによって個々の現象学者が用いてきた事象開示的な統制力の使用法を身につけら
れるからである。探究プログラムにおいてテキストは、研究されるべき「目的対象」ではなく、自らの現象学的営み
を展開するための「手がかり」としてのみ位置づけられる。こうした意味でも「事象それ自身へ」というモットーは、
最も外域で現象学の探求を統制するコアとなっている。

さらにまた、初期フッサールが繰り返し述べていた「無前提性原理」もコアのひとつである。② それは、先入観や思
い込みを可能な限り排しつつ、事象それ自身へと向かうしなやかなまなざしを身につけるよう現象学者に要請する。
これも統制的な意味をもつだけであって、現象学は事実、一切の先入観を前提することなしに実行できるということ
を意味しない。それゆえ、プログラムとして現象学を構想する場合、前期フッサールが歴史性を顧みていなかったと
いう歴史主義的な解釈学からの批判は筋違いなものとなる。③ これら二つの原理は、「現象学的探究の前進に際限はな
い」という別の原理を暗示しているだけである。④

おそらくこの他にも、現象学のコアユニットは多数設定可能である。例えば、「認識主体は世界との切り離しえな
い相关性をもつ（志向性）」や「身体は世界に意味を与える」というような、より具体的なコアを選択することもで
きる。それによりプログラムの探究領域は固有に分化し、特殊化する方向へと統制づけられていく。その際コアに含
まれる用語の内実は、「事象」概念が示していたように、明確に定義される必要はない。むしろ不明確なコアを手が

かりに「仮説的記述」が産み出され、それが吟味されるなかで、コアの内実が逆に再規定され、当初理解していたコアとは異質なものになるような柔軟性や自在さが必要だけである。コアの内実が仮に変容すると、そのコアに導かれていた仮説的記述の集合それ自体も新たに組織化され、プログラムは自己組織的に展開する。経験の学としての探究プログラムは、コアの内実を厳密に定義する公理系的な「統制型プログラム」ではなく、「自己組織化型」として理解しておいたほうがよい。¹⁴⁾ 探求され、吟味されるべき経験が、公理系的な統制力に即して展開する保証はどこもないからである。

3. 補助仮説の選択・現象学的還元と明証性

プログラムのコアである原理の設定に続いて、現象学における仮説的記述のネットワークについて考察する。実はこちらが、現象学をプログラム化する際の最も困難なポイントである。そもそも原理の設定だけであれば、多くの伝統哲学理論が行ってきたことである。世界事象の根底に四つの原因を設定すること（アリストテレス）や、実体やモナドの定義からそれらの派生的展開を導出していく試み（スピノザ、ライプニッツ）も固有な原理設定にかかわっている。この原理設定から、プログラムへと進むためには、仮説的記述のネットワークを形成し、それに吟味や修正可能な余地を組み込んでいく必要がある。さもなくばプログラムは疑似絶対的な体系の安定性を獲得し、テクスト解釈の歴史文献的研究が蓄積されるだけとなる。

ここでは、現象学の補助仮説として採用可能であり、かつフッサールの探求を根底から方向づけていたものとして「現象学的還元」と「明証性」を取り上げる。これらは明らかに、事象それ自身へ迫るための道具立てであり、フィシクが「操作概念」と名づけたものに関係している。¹⁵⁾ 前者は、事象へ接近するための「体験世界の開示」にかかわり、

後者はその体験世界についての「記述の正当化」に関わる。それゆえ還元による体験世界の開示は、事象接近への端緒であると同時に、発見と創造に溢れた場となるのに対して、明証性概念は、そのようにして開示された事象記述のブレや歪みを修正し、最終的には「学問の客観性」を確保する現象学的な必要条件となる。

①現象学的還元

「現象学的還元」は、繰り返し改良可能な補助仮説のひとつである。というのもフッサールが何度も新たに実行しつつ訂正し、メルローポンティが正鵠に洞察したように、そもそも完全な還元など存在せず、むしろ還元的操作は、新たな事象領域が見えてくると同時に、それまでの還元が十分ではなかったことを現象学者にそのつど自覚させるという「自己修正機能」を備えているからである。¹⁶この還元には非常に不思議な特性があり、それは世界の現れを同一ものとして維持したまま、それまでとは異なる世界とのかかわり方を出現させる。例えばそれは、「措置 (Satzung)」という認識論的なバイアスのかかった定立作用から、行為レヴェルでの世界と主体の組織化のあり方へと注意を向け変える。ここが、「先反省的」や「受動的」、「生」、「実存」という多くの概念で記述されてきた体験領域でもある。この体験の動きが経験できない場合、フッサールのテクストをいくら解説しても還元を実行することは困難である。世界現出が同じまま、当の現れとの距離感が体験的に異なってくる場面が、還元的操作の端緒であり、これが不随意的に起こってしまえば、離人性の病態に近づくとも予想される。¹⁷フッサールは、自ら踏み込んだこの体験領域の隙間に、現出と現出者の差異が生起する志向性を発見し、そこから意味や時間性、身体性というように多くの課題を取り出していった。ということは逆に、もはや課題が見えてこないような還元のやり方は、既に経験の揺れ幅が一定範囲に収まり、経験拡張の誘導に失敗しているか、迫るべき事象とすれ違っていると考えた方がよい。還元の内実は、新

たな経験に踏み込めたものが、事後的にその歩みを振り返るなかで徐々に記述として固まってくるところがあり、その後それが他者によって共有され、実行可能になる。その意味でも経験の揺れ幅が安定し、言語的な意味で画定された還元は既にその役目を終えている。例えばシェーラーは、還元遂行後になぜ対象の時間位置と空間位置が確保され続けるのかとフッサールを執拗に批判していた¹⁸⁾。フッサールにとって時間位置と空間位置は、体験野に内的な構造化をもたらす本質契機であり、その構造化をもたらす当のものの安定性が崩れ去るような還元を実行することはできなかった。ここにシェーラーとフッサールの分岐点が出現しており、経験や体験様式の深みを新たに発見し、細かなまなざしを向けるための還元は今なお実行可能である。

② 明証性

次に「明証性」の仮説的身分について考察する。明証性とは、還元後の現れが現れとしての自らを引き受けることに与えられる名称であり、そこにはさまざまな度合いが含まれる。ただしフッサールの場合、この明証性に認識論的基礎づけ的なバイアスがかかりすぎている。それゆえプログラムとしての現象学では、この概念はフッサールが用いる意味を拡張して用いられるか、認識論的な縛りを解除する必要がある。明証性は、事象記述の「客観的普遍性」や「私的体験の掛け替えのなさ(クオリア)」を保証するものではなく、探究の方向性を示唆し、開示する「予期の精度」にかかわるものとして理解されるべきである¹⁹⁾。というのも、「客観性」や「絶対性」を正当化する試みの放棄から現代科学の展開は始まったからであり、「探究の展開」と当の「探究成果の正当化」は、それ自体としては独立の課題だからである。明証の正当性とは、研究が展開した、もしくは挫折したという歴史的状况を踏まえた後に付け加えられる副次的レッテルである。

にもかかわらず、フッサールの「明証性」概念は、「絶対的存在」という決して反証できない仮説をプログラムに導入することになりかねない。例えば、「現象学的体験は絶対的明証性をもつ」という言明に修正を許す余地があればよい。しかし、何をしても反証されえない確信としてこの言明が用いられる場合、それは仮説ではなく、原理としてプログラムに組み込まれている。仮にそうであるとすれば、この原理から、どれほど前進的な探求の展開が導き出されるかに焦点は絞られる。しかし他方、「神は全能である」や「精神と自然は絶対者においてひとつである」といった、絶対的原理を組み込んだプログラムの多くは、新しい「事象の発見」や「経験の拡張」を方向づけることに重点を置くよりも、さまざまな事象の中から、その絶対的原理があたかも実現されているかのような事象を恣意的に選び出し、「原理の正当化」に力を注ぎやすい。つまりそこでは、新たな事象が発見されているのではなく、原理というバイアスをかけた事象の似たような見え方だけが問題になっている。その場合、コアの設定の仕方に問題があるのであり、探求停止を導くようなコアはあっさり放棄したほうがよい。哲学的な全称命題の多くは、こうした停滞を引き起こす原理的な危険を秘めている。

「究極的に作動する自我は反省にもたらされない」という現象学者には周知の命題も、事象それ自身へという motto を順守する中から見出され、さまざまな派生形が生み出されてきた。ただしこの命題も、吟味可能なものとして導入されているのかどうかは微妙である。この言明自体は、「運動系の記述」と「状態指定系の記述」が一致することがないのを基本とした、ゼノンのパラドクス以来の息の長い哲学的課題でもある。見るはたらきは見られる眼球と一致することはない。にもかかわらず、眼球とは別に、見るはたらきがあることもどこかで分かかっており、現実世界ではこの落差に気づくことはない。それゆえ現象学者は、この落差を改めて主題化することで「見る」と見られたもの、「語る」と語られたもの、「存在と存在者」、「現れないものと現れるもの」といった様々な二項対立を開発

してきた。この落差は、認識問題から存在問題を経て、倫理問題へと変遷してきたように見えるが、今後どのような展開可能性を示唆するのが定かでないまま、特殊形而上学的な原理言明として量産されている感がある。

4 現象学の探究吟味コード

コアから導出される仮説的記述のネットワークは、繰り返し吟味されねばならず、この吟味プロセスが探究プログラムにとって決定的な役割を演じる。もしプログラムの中に吟味不可能なコアだけしか存在しなければ、そのプログラムはそもそも前進しているのか、停滞しているのか、もしくはコアユニットの言明を単に別の言葉で置き換えているだけなのか判定できない。例えば、絶対的な外部性をめぐる記述に「語りえぬものは、語り続けることによって語りえない」といった言明の開放性に訴えるものがある。どうすればこうした言明は、それが指示する経験領域に固有な内的記述であることを吟味し、再度新たに語り直すことができるのか。その吟味が可能でなければ、分かる人には分かるという「信仰の問題」にすり替わっている。

探究プログラムは、「経験的前進」と「理論的前進」のどちらも示すことができない場合、捨て去られる運命にある。²⁰「経験的前進」とは、仮説のネットワークを吟味するための事例が持続的に増加することで、たとえ断続的であっても前進している印象をとかく外部に与えることである。他方「理論的前進」とは、理論仮説の集合が経験事例のなかで吟味されることで、より周到に整備され修正され、次の仮説が創造されていくことを意味する。経験的前進はある程度の時間経過を必要とするのに対し、理論的前進は突然起こりうる場合がある。そうした前進が生じると、集積される経験事例の質や量が激変する。

精密自然科学的なプログラムにおける理論仮説は、周知のように「真／偽」という二分法コードで吟味される。緻

密に組織された実験や観察を通じて真偽の度合いが精密化され、仮説の暫定的正当性がそのつど判定されるのである。これは理論およびデータの「共有可能性」と「再現可能性」、そしてそこからの「予測可能性」を確保するための経験科学的工夫である。精密科学は、たとえ暫定的であれ反証に耐える確度の高い知見を土台に新たな現象を予測し、理論展開する。

それに対して現象学的な探求では、そもそも真偽という言明が成立する以前の認識基盤や、歴史的、実存的、体験行為的な基盤へと探求のまなざしを屈かせようとするのであるから、そうしたコードが単純に妥当しないのは自明である。むしろ既存の経験可能性の幅に変動を起こし、そこに探究領域を開くことだけが、プログラムの前進を保証する。例えばフッサール現象学の場合、当初探究対象は「超越的 (transzendent) / 内在的 (immanent)」、「志向的 (intentional) / 実的 (reell)」という事象コードによって区分され、それが「超越論的 (transzendental) / 自然的 (natürlich)」という方法的コードによって再吟味される手続きを踏んでいた。しかし「地平」や「身体」、「自我」、「他者」といった固有カテゴリーが発見されるにつれ、先のコードでは首尾よく区分できない経験領域が多数あることが判明する。それによって探求は、コードによる配置や説明を与えるのではなく、むしろ既存コードによる区分を外れていく事象によってコード自身の変貌を促す段階に至る。事象分析の真価が問われるのはこうした場面である。それゆえ仮説的記述の吟味コードも明証的、実証的な「真 / 偽」ではなく、経験可能性の「拡張 / 維持」、その「成功 / 失敗」という実践的コードとして前景化する。仮説的記述が成功しているのかどうかは、実証科学的な真偽基準によっては判定しえない。そもそも現象学では、既存の事実や権利の実証的な追認は問題になっておらず、「経験」の内実も、超越論的なものに對比される empirisch なもの²¹⁾や、自然科学的な観察言明には限定されない。むしろ経験可能性は、感性的、超越論的、精神的、知性的、動物的という多くの形容詞を許容すると同時に、それらひとつの領域に閉じら

れることなく「人間の可能性」を拡張するものとして要請されている。²³特にフッサールの場合、体験的な世界とのかかりが既に超越論的なものであるから、「超越論的経験」や「超越論的体験」も矛盾概念ではない。むしろそうした概念が提起された際に、それら概念のもとでのような経験が実行されているのが吟味され、その経験記述が多くの探究課題へと開かれねばならない。その際の吟味基準は以下のようなものになると予想される。①自らの現象学的経験に内的であり、それまでの経験可能性の幅に変動が生じるかどうか、②プログラムの参加者にとっても経験形成的であり、その記述が共有可能となるかどうか、③記述とともに次の課題が現れ、探究が持続可能になるかどうか、④現行の経験科学的な理論や事例との整合性がどの程度とれ、かつ他の経験科学者の探究の手がかりとなりうるかどうか。これら要件の①③が現象学を実行する際の最低必要条件であり、②はプログラムの必要条件である。④は、経験科学の成果を足がかりに現象学的経験の誘導と拡張を促す外的指標である。²⁴特に①と③の協働は、新たな経験領域の発見、そこでの対象や概念、機能モードを細分化していく際に不可欠となる。

例えば①だけを満たす場合、経験は神秘体験のような特異点の一回的記述となり、誰にも理解されず、忘却されるか、黙殺される。ただし、あまりにも特異で強烈な経験である場合、その経験に記述が溢れ、一個の作品となることもある。²⁴また①、②だけが満たされる場合、共有経験の固有さだけが前面に出ることで同内容の論述や主張が量産され、疑似宗教的な研究グループに近づく。③だけを満たす場合、見かけ上探求は展開するが、経験に固有な問いが立てられていないため、文献から文献へと遡及する歴史学的な探求か、語源分析や論理分析に力点が置かれた神話や物語の創作となる。①、③だけが満たされる場合、本人にとっての探求は展開し、記述の多産が前景化するが、プログラムは共有されず、外的に見れば一個の謎のようなものになる。多くの芸術家の試みもこれに近いところがあり、いずれ②の要件が満たされる可能性に開かれている。これら①〜③の要件は、そのつど④の要件と照合される必要があ

り、そのことが他の経験フィールドとの相互展開を促す。

これら要件を満たすように、現象学者は自らの仮説的記述を多様な経験フィールドで吟味し、また逆に、多様な経験フィールドから新たな記述を発見的に創造する必要がある。脳神経科学や神経生物学、認知科学といった経験科学の成果だけではなく、芸術制作や作品、アスリートや心身障害者の固有経験といった豊富な経験事例は、それらを現象学的な体験レベルの知に変換できる限り、すべて探求の手がかりとなる。事実メルロポントイは、個人の経験では届かない体験領域を、多様な臨床現場のデータによって補足し、レヴィナスは、容易な追体験を許さない強烈な戦争体験を、自らの現象学的分析に用いていた。現象学を探究プログラムとして実行するのに必要なのは、自らの経験フィールドを拡張し続けることであり、この拡張される経験フィールドが、分析対象であると同時に、その分析記述を吟味するデータとなる。こうしたプログラムの設定によって初めて、自己の経験の範囲外にある他の現象学者の記述を、体験的に変換することなく単に意味的に理解し、整合的に体系化する試みや、論理的な条件導出や語源的な意味づけによって配置する試みが、非現象学的なものとして展開可能性を失っていくことになる。

5 経験モードの吟味例

ここでは、「身体経験」に関する吟味プロセスの一端を示す。フッサールの現象学的記述が開示したもののひとつに「地平志向性」というものがある。世界の現出空間は、即自的な絶対空間ではなく、パースペクティブ的な主体を中心とした、それ自身現出することのない地平に取り囲まれている。地平志向性が明らかにしたのは、そうした生空間（方位づけ空間）のひとつである。このことは、健全な現象学者の経験にも裏打ちされている。「対象現出を可能にする地平はなだらかに連続する」。この仮説的記述は、意識にとっては余りにも明証的であるが、体験的な世界

ではそれほど明証的でも、正確な記述でもないことが明らかになりつつある。

大脳皮質の頭頂連合野では、多感覚ニューロンが多数発見されており、そこでは同じニューロン群が、全く異なる視覚、触覚、聴覚刺激に反応する。例えば、手を口にもっていくという「触覚的」動作に反応するニューロンが、他の手が自分の口に近づくのを「視覚的」に確認する際にも反応したり、首に触れる際の受容面をモニターするニューロンが、耳元で音を鳴らす際にも反応したりする。つまり、そのニューロン群だけでは、感覚刺激との一義的な対応関係は確定されえない。むしろこれらニューロンは、五感に対応する刺激をモニターするのではなく、身体の中線軸に手や腕、顔、口がどのように運動するのか、つまり身体四肢が「到達可能なエリア」を、さまざまな感覚器を用いてモニタリングしている。このエリアでは、対象の大きさの恒常性が比較的よく保たれるため、対象に触れる以前に、その対象に合わせた手のかたちをつくるプレシェイピングが有効に働くだけでなく、接近してくる対象に対して咄嗟の身体体勢が取れるような行為の準備空間が形成されているらしい。視力が微弱な幼児であっても、到達エリア内での反応が抜群によいのはそのためである。

この「到達可能エリア」と、それ以外の「遠隔エリア」が、脳内で明確に機能分化していることは、脳の損傷部位およびそれによる疾患から明らかになった。⁽²⁶⁾ 前者の障害は、運動前野の腹側部および頭頂連合野、後者は前頭視野の損傷によって起こりやすい。例えば「遠隔エリア」障害で患者は、目の前にある電話機へと手を伸ばすことはできても、体幹を少し移動させなければ到達できないような対象物の場合、その位置をうまく把握できない。電話機のほんの先にある対象でさえそうである。たとえ対象が認識されていても、その対象へと行為的にかかわることができないのである。体幹の移動によって即座に到達可能エリアと遠隔エリアの境界はブレるからであり、そのブレに対応するモダリティ変換が失われているからである。⁽²⁶⁾ 遠隔エリアは、視覚的な光学情報が優位に働いて組織化されるに対して、

到達可能エリアは、視覚以上に体性感覚や聴覚、身体内感が動員されることで組織化されている。とすれば、自分が手元で読んでいる本と、ちょっと離れた戸棚にある本は、全く別の断絶した空間に属している可能性が高い。

「到達可能エリア」と「遠隔エリア」の境界は、健常的な意識の明証性からは簡単に明らかにはならない。むしろ脳内プロセスは、断絶している地点を無理やり統合し、消失させることで、意識のまとまりをかるうじて成立させているように見える。そうした断絶地点に意識が向かうことは、認識や行為を遂行するためのコストを増やすだけで、利点はない。その意味でも意識には、それが成立すると同時に多大なものを見失い、しかもそのことに自らが気づけないという特質があると予想される。²⁷⁾

こうした経験事例は、フッサールが行った「外的地平」と「内的地平」という地平志向性の概念区分が、地平構造を十分に捉え切れておらず、それほど正確な規定でもないことを示す「手がかり」となる。障害を抱えた彼らが、どのような体験世界を生きているのかは、一義的には決定できず、別様な経験をものとして固有な分析対象となる。こうした経験事例の吟味によって「地平」概念は、探究の前提となるような概念ではいまだなく、未知の問題に溢れた探究課題へと変化する。触覚空間と視覚空間という異なる空間質の統合や、行為の手がかりになる聴覚刺激がどのように空間構成に参与するのかは、まだよく分かっていない。その際例えば、中枢神経系障害者を治療するリハビリテーションの現場は、みずからの記述を吟味するための絶好のチャンスを現象学者に与える。リハビリテーションの現場だけではない。多様なフィールドへと赴き、自らの経験を拡張するよう試みることは、プログラムとして現象学を実行する際には必要不可欠である。さらにフッサールが明らかにした諸概念の中に、こうした吟味可能な概念が多数あるということは、それはそれで、いまなおフッサール現象学が訂正可能性および展開可能性をもち続けたプログラムであることも証示している。

6 モデルと現象学的分析の創造性

これまでの論述によって、探究プログラムとして現象学を実行する際の最低限の枠組みが素描されたことになる。プログラムの設定は、現象学者が他の経験科学のフィールドで作業する際に、哲学という外的立場から何の実効性もない主張をただ繰り返すという事態に陥らないための最少規範でもある。特に原理の設定には注意が必要である。原理は本質直観的な洞察による場合や、当初、仮説であったものが探求の展開に応じて、コアの位置を占めざるをえないという形で徐々に認識されていく場合があると予想される。その際原理は、新たな探究領域を固有に分化させ、多くの経験モードの発見に寄与しない限り、放棄されねばならない。ここでは最後に、そうした原理や仮説の選択に際して重要なポイントとなる「モデル」の役割について考察しておく。²³⁾

①基礎づけモデル

多くの哲学的な課題設定では、ある事象を説明する際に、その事象の根拠や原因を説明することが求められてきた。これは、事象の成立に過不足ない説明を与えることであり、理由の系列を開示し、自然因果の系列を開示することで最終根拠、原因を確定することでもある。例えばカントにおいては、認識批判的な論証を通じて、個々の経験の成立が「経験の可能性の客観的根拠」²⁴⁾からの基礎づけとして説明されている。その際哲学の課題は、「特殊を普遍においてのみ考察する」²⁵⁾ことであり、最終的には、(可能的経験の)普遍妥当的な理論体系によって個々の特殊経験を基礎づけることにある。認識論的な課題設定と、客観的妥当性による「基礎づけ」モデルが不可分になるのはこの場面である。フッサールにおいてもこの点は変わらない。「絶対的な基礎づけと正当化による一つの普遍学」²⁶⁾の構想が、デ

カルトから受け継いだ現象学の理念であり、彼の場合それは明証性に基づく理論構想となる。

学問の絶対的基礎づけを理念とする、フッサールの現象学的分析それ自身にも多くの基礎づけモデルが導入されていた。領域存在論における諸領域、意識作用の種類と様相、意識の構成層（能動的、受動的）、時間と空間、生活世界と客観的世界、これらすべてが基礎づけ的な配置を与えられ、基礎づけられた派生態がより根源的に基礎づけるものを遡示する形となる。こうした試みが成功しているのかどうかは、諸構造間の必然的、普遍的、客観的つながりが確認されるかどうかによって決定されるが、そうした妥当性要求一切は、周知のように「無限後退」、「循環」、「独断的中断」というトリレンマから逃れることができない⁸³。フッサールの探求にもこれら正当化の畏が繰り返し現れていたし、無根拠や無底といったものを基礎づけの原理としてこっそり用いる言説もその誇りを免れはしない。

さらにより厄介な問題は、このモデルを用い続けると、探求が根源的な様態へと近づくにつれ、次の展開の選択肢が限定され、経験記述の細かさが失われてしまうことにある。「深さ」や「暗さ」、「匿名性」といった根源性を指標する表現や、「非実体的」、「非反省的」といった消極的規定、もしくは「現れないものの現れ」といった自己矛盾的規定が多用される際には、既にそうした事態に陥っている。つまり、記述言語に自らの経験が追いつかず、それ以上詳細に語ることも、次の展開見込みを示すこともできない地点に突き当たる。また事象根拠の優位関係上、より根源的なものに一度触れてしまうと、そこから改めて派生的なものに戻り、そこでの経験を細かく分析することも困難になる。つまり、現に成立している派生的経験の論理的必要条件は取り出せても、その経験の生成の諸相が素通りされたまま、個人的経験の枠組みが無理やり普遍化されるのである。おそらく基礎づけモデルには、「それ以外にはありえない」もしくは「その非存在は考えられない」という認識論的バイアス（必然性要求）が強くかかり過ぎており、事象を過度に秩序立てて配置することで、経験の幅と探求の可能性を狭めている。数学的公理系の規則とは異なり、

経験の解明にそうした排他的正当化が成立する保証は本来どこにもなく、可能的経験の範囲がそれとして決定され、それが普遍的に妥当する保証もない。⁽³⁷⁾

基礎づけモデルはこのままだと、プログラムの発想との折り合いが悪い。基礎づけが、既存の経験の成立条件や事実の確証に関係するのに対し、プログラムでは、そうした基礎づけ連関の度合いが変化し、崩壊するような経験の場をあえて特定し、事例を踏査することで、経験世界の変化可能性を発見し、そこから課題を取り出すような記述を目指す。その意味でも基礎づけモデルは、探究領域や探究対象に暫定的な配置を与え、見通しをつけた後に、次の経験へ向けて放棄されるべき解消発展モデルとして理解されたほうがよい。新たな科学的精神に必要なのは「世界を説明すること」ではなく、「経験を複雑化すること」であり、そこに展開可能なプログラムを設定し続けることである。⁽³⁸⁾

②自己組織化モデル

現象学をプログラム化することの前提には、経験の拡張は「生成プロセス」と「創発」を通して生じることとが含まれている（経験創発原理）。創発には、否応のない非連続性と質の相転移が含まれ、しかも「経験」の創発の場合、化学反応などは異なり、その経験を外から観望する同一主体の想定ができない。創発する経験は、当の主体において、主体として起こるからであり、それに巻き込まれる主体自身も変貌してしまうからである。⁽³⁹⁾ こうした局面は、新たな身体能力を獲得する場面、神経ネットワークが再編される場面、芸術的な制作技法や医療的な治療技法が開発されるような場面でそれとして出現する。この段階で基礎づけモデルは役割を終え、自己組織化モデルが前景化する。⁽⁴⁰⁾ 自己組織化は、進化論にも適用されているように、事象の多様性の出現の機構にかかわる。⁽⁴¹⁾ 当初より創発が組み込まれているため、帰納推理や仮説演繹的な予測可能性は断念されざるをえない。にもかかわらず、多くの経験科

学がこのモデルを採用するのは、それが多様化する経験に親和的なモデルであると同時に、固有の経験領域をそのつど発見し、探求を持続可能にする手がかりとなるからである。

この自己組織化に近い場面は、現象学でも自己構成や自己触発、自己産出といった用語で繰り返し語られてきた。フッサールの場合それは、究極的に構成するもの（超越論的主観性）それ自身の構成、生成の問いとして出現している。この問いは、究極的に構成するものがどのように反省され、認識されるのかという自己反省や自己認識の問いではない。そう理解した途端、問いは究極的主体の正当化的確証や基礎づけの問いに変換され、探究可能性が大幅に制限される。そうではなく、自己が新たに生成するということのなかに、どれほど多くの構成モードや生成モードがあるのかを見極めることが問題になっている。その際、自己組織化モデルの導入は、一義的な因果性や根拠関係が動揺せざるをえない場所で、現象学的な記述を展開するための補助機構となる。

例えば経験が不連続な創発を起こしたのに、認識主体がそのことに気づけず、取り返しのつかないことが起こったという余韻さえ感じ取れないような事例は、それほど珍しいことではない。その典型は、前頭連合野や右頭頂葉の障害による病態失認である。常人以外の誰が見ても、これまでにはない経験をしているはずなのに、その常人は何食わぬ顔で奇妙な行為を継続する。こうした事例を見て、超越論的主観性はそれでも維持されているというような基礎づけ的議論に持ち込むのではなく、例えば、行為と認識が乖離する現象を自己組織化の一つのあり方として捉え、この乖離の奇妙さに注意が向くような経験誘導の手順を模索するのである。それにより認識や行為、情動、注意といった経験領域の機構がより詳細になり、失認という疾患の中にどの程度の意識の変容可能性や組織化可能性が含まれているのかを取り出すことも可能になるはずである。自己組織化モデルの導入は、健全な現象学者ではどのようにしても届きえない体験領域に記述を届け、探究領域を拡張するためのプログラムのひとつである。

③ 発見的モデル

フッサールは、意識の過去地平を分析する際に、「沈殿化 (Sedimentierung)」という概念を頻繁に用いていた。意識を経過する出来事は、その基層へと沈み込み、それらが層状に堆積することで意識の固有な歴史を形成するというのである。しかし、そもそも意識という実体性のないものが、地層のように堆積物の沈殿から成る保証はどこにもない。にもかかわらず、このモデルを用いることで意識の過去性の説明が格段と判明になる。つまりこの概念は、地質学や古生物学から借用された、意識構造を解明するための「発見的モデル」のひとつである。また他にもフッサールは、「演出 (Inszenierung)」という概念を用いて意識を舞台装置の一種に見立てた記述もしている。⁽³⁹⁾ここで留意されるべきが、経験科学的探求の展開に関与する発見的なアナロジー関係である。⁽⁴⁰⁾

そもそもモデルとは、「原物」と「モデル」というように、同一ではない複数項の間に、部分的特性を共有する関係が成立する際に用いられる。あるアナロジー関係には、共通項としての「肯定的アナロジー」と、共有不可能な「否定的アナロジー」だけではなく、そうした肯定とも否定ともいえない「中立的アナロジー」が含まれている。沈殿化のモデルでいえば、そもそも意識には、堆積物に相応する「物質」が存在しない。それゆえ物質という特性は、このモデル理解では否定的アナロジーとなる。モデルが発見的と言われるのは、未知の中立的アナロジーが探求の意図せぬ展開を方向づける可能性を秘めているからである。

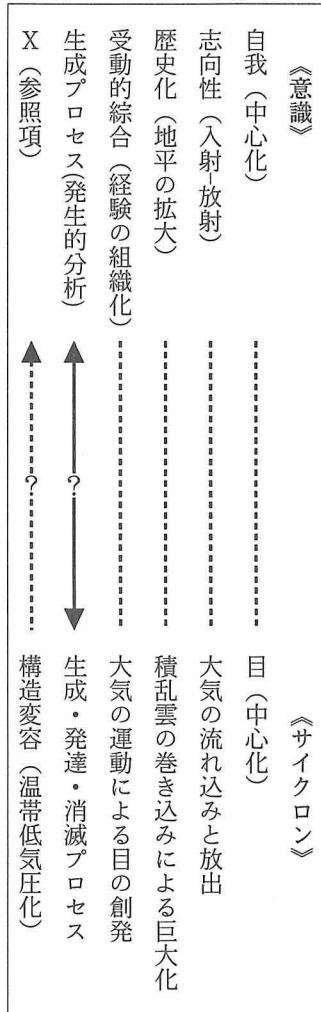
フッサール現象学の時間論に類出する「意識流」という概念もモデルのひとつである。「意識」が本当のところ「流れ」であるのかは、最終的には答えようのない問いであり、フッサール自身がメタファーであると認めていた。⁽⁴¹⁾にもかかわらず、この概念はいまやモデルである以上の現実性をもってしまった。確かに「流れ」には固体的実体性がなく、「意識」にもそうした実体性はない。さらに、フッサールが意識に内的に関与すると考えた「時間性」は

「流れ去る」という表現からも明らかなように、日常的に「流れ」のアナロジーとして語られる。「流れ」に含まれるこの「実体性のなさ」と「時間」という肯定的アナロジーが「意識」と通底することで、「意識流」というモデル理解が成立している。その他方で例えば、「時は金なり」というアナロジーも存在する。にもかかわらず、「意識金」というモデル理解が成立する可能性はありそうもない。というのも、「金」の「実体性」が意識の「実体性のなさ」に抵触しているからだけではなく、それが意図する「貴重さ」にのみ力点を置くアナロジーからは、意識分析のどんな次の展開も見込めないからである。

なぜ「意識流」は採用され、「意識金」は採用されないのか。この自明とも思われる問いを立てることで、「金」では、意識との否定的アナロジーが目立ちすぎるのに対し、「流れ」では、否定的アナロジーを覆い隠すほどの強い肯定的アナロジーが働いていることが分かる。それゆえにこそ、これまで「流れ」としての意識が「湿っていたり干上がったたりしないのか」、もしくは「淀んだり、濁ったりしないのか」といった「否定的アナロジー」に関する問いが立てられずにきたのである。だからといって、流れが意識を記述するためのモデルであることに変わりはない。それゆえ、もし意識についての現象学的分析がこれ以上展開しないのであれば、このモデル解釈に限界がきていると考えるのが筋である。フッサール自身が、「流れ」の流体的な運動特性を十分に活用しつつも、晩年の時間論では、そのモデルからは直接導出されえない「立ちとどまり」という契機を、新たな仮説として導入していた。

ここでは試みとして、意識を「サイクロン（熱帯低気圧）」構造とのアナロジーで捉えてみる。いわば意識を台風のようなものとしてモデル化するのである。サイクロン構造も、「流れ」に内的な運動性を包含しており、それ自体は固体的実体性をもたない。さらに、意識の志向性を担う「自我」に対応するように見える、台風の「目」にも実体性がない。つまり目は、大気の絶えざる運動の中でそのつど維持されている虚空点にすぎない。ただし実体性がない

とはいえ、外部から見ると目が存在していることは誰にでも分かる。この点でも自我の存在に酷似している。またサイクロンは、中心へと大気が流れ込むと同時に上昇気流で煽られた大気を放出するが、こうした入射―放射の構造は、「志向性」理解とも符合する。つまり、歴史を担う地平志向性の編み目がそのつど投企されるように、その「目」を中心に周囲の雲一切が層状かつ動的に配置されている。だからといって、この「目」が主体的に振る舞うことで雲を配置しているわけでもない。むしろ目こそ、周囲の気圧配置が変動することで発生する大気と雲の動きに応じて、図らずも中心化的に形成されてしまう当のものである。その意味では、「受動的総合」の構想とも十分符合するはずである。



こうしたモデル理解で重要なのは、当のモデルが既存の事象記述に相応しいことを誇示することではなく、それが新たな探求を方向づけ、発見的てがかりになるかどうかである。サイクロンには、発生、発達、衰弱、消滅といった生成プロセスが含まれているが、これらは、意識の肯定的アナロジーであるのか、否定的アナロジーであるのか。発

生的現象学の成果を容認するかどうかによって、それは肯定的にも否定的にもなる。もし肯定的であれば、それとともに現実世界が出現する超越論的意識の発生、発達、衰弱、消滅を積極的に問う可能性が出てくる。さらに、サイクロンや台風といった「熱帯低気圧」は、全く別の大気構造をもつ「温帯低気圧」へと変容するが、こうした「構造変容」の可能性を超越論的意識はもちあわせているのかも新たな課題となる。中立的アナロジーのひとつであるサイクロンの「構造変容」が、意識にとって肯定的か否定的かになることで、探求は分岐点に直面する。特にこの点は、精神障害等の患者に現象学的まなざしを届かせる際の最重要課題となる。

また例えば、認知神経科学者のヴァレラと共同研究を行い、自前でプログラムを展開しているデブラズは「虹」というモデルを導入し、情動現象の固有領域を再設定しようと試みている⁽²⁾。虹は、雨上がりや滝つぼに出現し、水と光が交差する位相に創発する自然の色彩現象である。彼らはこのモデルによって、生理的身体と現象学的身体のどちらとも密接にかかわり、かつその両者に還元できない情動経験の場所を特定しようとしている。サイクロンにしろ、虹にしろ、このように意識経験の記述との類似性をもつモデルが現に多数存在しているということは、実は現象学者は、これまでもそうした経験イメージを用いつつ分析を行っていた可能性が高い。そうでなければ、経験的に容易に証示されないもの(参照項X)に現象学的に踏み込むためのどんな手がかりもないことになる。その意味でもモデル理解は、自らの現象学的経験を拡張するための発見的、創造的の手がかりとなりうる。また、「流れ」や「サイクロン」といったモデル相互の比較によって、Xの様々なモードの違いが露わになる可能性も生じる⁽³⁾。ただし、モデルが重要な役割を演じるのは、あくまでもそれが経験可能性の拡張に寄与し、探求の展開を促す限りにおいてだけである。それゆえ、モデル理解は繰り返し経験フィールドで吟味され、可能な限り別の発見的モデルに置き換えられていく必要がある。さもなければ、文学的物語と現象学的記述の差異が失われることにもなりかねない。メルローポンティの

「肉」やレヴィナスの「顔」も発見的モデルの一種である。こうしたモデルの設定は、それが展開されるべき事象に内的なアナロジーであればあるほど、単なるレトリックという意味を超えた創造的効力を発揮する⁽⁴⁾。ただし、そうした意味での発見力が失われ、探究課題がもはや取り出せなくなった場合は、次の展開力を備えたモデルに置き換えられることで、プログラムはその推進力を獲得し続けるのである。

註

- (1) 本稿は、平成二十年度科学研究費補助金（若手研究B、研究課題「リハビリテーションとしての現象学」、課題番号197200100）を受けての研究成果の一部である。
- (2) 例えば、H. Cohen: *Kants Theorie der Erfahrung*, Berlin, Bruno Cassirer, 1918, H. Rickert: *Der Gegenstand der Erkenntnis Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen, 1928, P. Natop: *Kant und die Marburger Schule*, Berlin: Reuther & Reichard, 1912. 既にハイデッガーは二〇世紀初頭に、現象学とすれ違い続ける新カント派に向けて、辛辣な批判を行っていた。M・ハイデッガー：『時間概念の歴史への序説』（創文社、一九八八）、一五頁以下参照。
- (3) これは、ハイデッガーが師のフッサールに述べた謝意の言葉でもある。彼は、『存在と時間』の現存在分析が開始される直前の箇所で、「以下の探求が『事象それ自身』の開示においていくらかでも前進している（vorwärts gehen）なら、そのことを筆者は誰よりもE・フッサールに負っている」と述べている。プログラムにとって重要なのは、探求の前進であり、展開である。事実ハイデッガーは、新たな現象学をここから開始した。ただしこのことと、ハイデッガーのプログラムが今なお展開可能であるかどうかはまた別の問題である。M. Heidegger: *Sein und Zeit*, Niemeyer, 1993, S.38, Anm.1.
- (4) 河本英夫：『システム現象学』（新曜社、二〇〇四）、二一九頁以下。
- (5) ポパーは、絶対的な真理を確証するような「検証（verification）」がありえないことから、そのつど暫定的に反証を乗り越えることを意味する「検証（corroboration）」という用語を選択しているが、ここではそうした細かい概念の規定は行わない。参照、K・R・ポパー：『科学的発見の論理』（大内・森訳、恒星社厚生閣、一九七二）。

(6) I・ラカトシュ・『方法の擁護』(村上・井山他訳、新曜社、一九八六)、七二頁。科学論の文献の枚挙に暇はないが、なかでも以下のものを参照した。E・シュトレッカー・『科学哲学の根本問題』(常俊・西谷訳、晃洋書房、一九七七)、W・I・B・ビヴァリッジ・『発見と創造』(松永・鞠子訳、培風館、一九八〇)、A・F・チャルマーズ・『科学論の展開』(恒星社厚生閣、高田・佐野訳、一九八三)、H・I・ブラウン・『科学論序説』(野家・伊藤訳、培風館、一九八五)、L・ローダン・『科学は合理的に進歩する』(村上・井山訳、サイエンス社、一九八七)、河本英夫・『諸科学の解体』(三嶺書房、一九八七)、また最近のものとしては金森修・中島秀人編著・『科学論の現在』(勁草書房、二〇〇二)、伊勢田哲治・『疑似科学と科学の哲学』(名古屋大学出版会、二〇〇三)が詳細な輪郭を与えてくれる。

(7) 反証可能性以外の科学的理論の妥当性をめぐる議論は、シュトレッカーの前掲書に詳しい。特に三章以降参照。

(8) プログラムにとってAかBかの立場の選択を迫り、自らの立場を正当化することは重要なことではない。むしろ、どちらの選択をめぐるとして多くの展開可能性が開かれ、探求の停滞を避けられるのかを見極めることだけが重要である。ここでは、立場をめぐるとして多くの展開可能性をめぐるとして、経験の探求の余分なコストを下げるのが問題になっている。

(9) 例えはファイヤーアイベントは、前進的プログラムを後退的プログラムからどのように区別するのか、もしくは放棄されるべき時期を明示できるのかといった批判を繰り返している(P・K・ファイヤーアイベント・『方法への挑戦』村上・渡辺訳、新曜社、一九八一)。ラカトシュ自身も原理的な放棄はできないことを容認しつつ、アドホックな仮説だけでつじつま合わせをし、自らの立場をひたすら言い直すだけのプログラムは、いずれ廃棄されるはずであるし、廃棄されるような社会制度が作られるべきであると答えている。しかし、このようにプログラムの内実を明確化し、定式化するというプログラム論自体がプログラムを展開することは独立の方向に進んでしまった可能性が高い。

(10) ハイデッガー自身がこのモットーに説明を与えている箇所は以下を参照。ここでは現象学の対象が論理的客観には限定されず、現象という語の根源的意味を確定することから探求を立ち上げるべきであることが説かれている。M・ハイデッガー・一九八八、九二頁以下。

(11) Vgl. E. Husserl: *Husserliana* XIX/1, S.24.

(12) こうしたプログラムの構想自体が、昨今の現象学の形而上学的展開への反対動向として必然的な歴史の運動の内にあるといった歴史主義的な批判も可能である。しかしこうした批判は、観察者がそれぞれの展開をひとつの立場とみなし、歴史という時

間軸上に配置を与えているだけである。これはプログラムを前進させることは何の関係もない。おそらく、超領域的に同一の形式で立てられる批判的、メタレヴェル的な問いは、プログラムを停滞させ、かつ、そのことに当人が気づけなくなるといふ哲学的失認の一種を引き起こす。

- (13) これは、フッサールが繰り返し実行し続けたことでもある。フッサール現象学に含まれる具体的な探求の展開については、拙書『衝動の現象学』（知泉書館、二〇〇七）を参照。

- (14) この点、ラカトシュの定義を大幅に変更しており、どちらかといえば、問題解決に力点を置き、コアの変容も認めるローダンの「研究トラディション」に近いとも言える。ただし、ローダンのように伝統的、文化的、社会的背景といった広範な要件を科学的営みの発展基準に組み込むことによって逆に、そうした制約の細かな指摘や、歴史的な事例の枚挙に力点が置かれ、プログラムがもっていた固有性が見失われてしまった感が強い。科学哲学におけるプログラム論は現に、「科学知識の社会学」や「認識論の自然化」といった議論の流れに巻き込まれ、消散したというのが妥当な現状把握のように思える。L・ローダン・一九八四、S・フラア：『科学が問われている』（小林傳司他訳、産業図書、二〇〇〇）参照。また、自己組織化型のプログラムについては以下の拙論を参照。稲垣論：『リハビリテーションの探究プログラマーリハビリテーションはどのような科学かー』、『リハビリテーション—人間再生の技法』（誠信書房、近刊）。

- (15) E. Fink: "Operative Begriffe zu Husserls Phänomenologie", *Nähe und Distanz* (Alber, 1976).

- (16) フッサールが『第一哲学』や『危機』において幾つもの還元の道を模索したこと、メルローポンティが『知覚の現象学』の序文で述べた還元の教訓は既に周知のことであろう。

- (17) 離人的特性を伴った「不自由な（すなわち病的な起源をもつ）エポケー」については、ブランケンブルク：『自明性の喪失』（木村・岡本・島共訳、みすず書房、一九九八）、一一〇頁以下、もしくは：『現象学的エポケーと精神病理学』、『現代思想 Vol.8-11』（若松昇・木村敏訳、青土社、一九八〇）、九八—一七頁参照。

- (18) M. Scheler: "Idealismus—Realismus", *Späte Schriften*, Francke Verlag Bern und München, 1976, S.207f.

- (19) 「明証性」を探究プログラムにとって有効な補助仮説へと練り上げるには、さらなる構想が必要になる。肯定的発見法を探り当てた研究者は、次の研究の手順がおのずから決定されていくような「予期」をもちつつ探求を進めるはずである。この予期それ自体は、順調に見えた探求が行き詰まることで外れることも十分考えられうる。にもかかわらず、その予期に頼ることな

しには、次の選択肢が現れず、探求の手がかり一切が失われてしまうような「予期」と、それへの「気づき」が存在する。この「気づき」は、芸術家やアスリート、リハビリテーションセラピストといった人たちにとっては、それほど不思議なものではなく、その精度にかかわる経験領域を特定し、プログラム化することは可能ではなくである。

(20) I・ラカトシュ、前掲書参照。

(21) この点、カントが用いる意味での経験とは同一視されない。カントにとっての理性批判は「経験による吟味を承認しない」からであり、このことがカント哲学の展開可能性を阻んでいる。I・カント：『純粹理性批判』（篠田英雄訳、岩波書店、一九九四）、第一版序文参照。

(22) こうした「人間を超えていくための」可想的プロジェクトのひとつが、荒川修作の天命反転プログラムである。荒川修作、マドリン・ギンズ：『死ぬのは法律違反です』（河本・稲垣訳、春秋社、二〇〇八）参照。

(23) クーンはパラダイムの吟味基準として、(1)実験と観察の一致、(2)内部の無矛盾性および他の理論との整合性、(3)応用範囲、(4)単純性、(5)豊饒性を挙げているが、精密科学だけを科学の基礎モデルとして考察しているため、科学性そのものの拡張課題としては十分ではない。T・S・クーン：『本質的緊張—科学における伝統と革新②』（安孫子・佐野訳、みすず書房、一九九二）、一—三章参照。

(24) 病跡学的探究にとって現在も必読のシュレーバーの独白と多言はその好例である。D・P・シュレーバー：『シュレーバー回想録 ある神経病者の手記』（尾川・金関訳、平凡社、二〇〇二）。

(25) 脳神経科学的所見については多数の文献が出ているが、とりわけ以下のものを参照した。乾敏郎・安西祐一郎編：『イメージと認知』（岩波書店、二〇〇一）、酒田英夫：『頭頂葉』（医学書院、二〇〇六）、松波謙一・内藤栄一：『最新 運動と脳』（サイエンス社、二〇〇〇）、トッド・E・ファインバーグ：『自我が揺らぐとき』（吉田利子訳、岩波書店、二〇〇二）、V・S・ラマチャンドラン、サンドラ・ブレイクスリー：『脳の中の幽霊』（角川書店、一九九九）。

(26) 芳賀赤十字病院の大越友博先生から頂いたパーソナルデータに、体幹を動かす必要のあるリーチング動作が目標予測に対して常に10 cmほど足りない症例がある。右麻痺の患者だが、左手を用いる動作でも10 cm届かないのである。ただし、軽度の意識障害もある多発性脳梗塞であるため、病巣の特定は難しい。

(27) こうした経験事例の分析は意識の多くの特質の発見につながる。フッサールが取り出した意識の三つの特質に留まらず、そこ

からどの程度さらに展開しているのかもプログラムの課題の一つである。

- (28) E. Husserl, *Erfahrung und Urteil*, Felix Meiner, 1999, S. 28f.
- (29) モデルの役割が探究プログラムの肯定的発見法にとって重要であることは、ラカトシュも認識していた。I・ラカトシュ、『方法の擁護』(村上・井山他訳、新曜社、一九八六)、七四頁以下。
- (30) I・カント：『純粹理性批判 上』(篠田英雄訳、岩波文庫、一九九四)、一七一頁参照。
- (31) I・カント：『純粹理性批判 下』(篠田英雄訳、岩波文庫、一九九八)、一七頁参照。
- (32) E・フッサール：『デカルト的省察』(浜渦辰二訳、岩波文庫、二〇〇二)、三三頁以下。
- (33) H・アルバート：『批判的理性論考』(荻原能久訳、お茶の水書房、一九八五)。一切の基礎づけを排除するアルバートの批判主義は、アールベルの超越論的遂行論によって再批判されることになるが、その際のアールベルの批判の核が、相互主観的な言語ゲームとその遂行主体の反省能力に置かれているため、経験や行為の幅があまりにも偏狭に限定され、その後の展開可能性を閉ざしてしまったように見える。K・O・アールベル：「知識の根本的基礎づけ―超越論的遂行論と批判的合理主義」、『哲学の変貌』(竹市明弘編、岩波書店、二〇〇〇) 所収論文参照。
- (34) 認識論的な基礎づけモデルの詳細な批判的検討は、以下を参照。L. Boulour: *The Structure of Empirical Knowledge*, Harvard University Press, 1985.
- (35) G・バッシュユール：『新しい科学的精神』(関根克彦訳、ちくま学芸文庫、二〇〇二)、一七〇頁。
- (36) G・バッシュユール：二〇〇二、二〇七頁以下、および河本英夫：二〇〇六、一三三頁参照。
- (37) 自己組織化の要件については、河本英夫：『システムと科学の哲学』、『哲学を生きる』(東洋大学哲学科編、知泉書館、二〇〇二) 所収論文を参照。
- (38) S・カウフマン：『自己組織化と進化の論理』(米沢富美子監訳、ちくま学芸文庫、二〇〇八) 参照。
- (39) そもそも「還元 (Reduktion)」や「遮断 (ausschalten)」といった現象学的タームもモデルの一種である。「遮断」は電気等の流れを差し止め、控えることであり、定立作用の中立化が本来にそうした意味で行われるのかは微妙な問題である。にもかかわらず、この用語を用いることで研究者のイメージ理解は大幅に進展する。モデルやメタファーに含まれるこうした役割が、説得の技法としての弁論術 (Rhetoric) に関係づけられてきた。ただしモデルには、説得的役割だけではなく、認識や経験の拡

張という発見的役割も存在する。特に「還元」は、「遮断」とは異なり発見の意味合いが強い。

- (40) M・ハッセ：『科学・モデル・アナロジー』（高田紀代志訳、培風館、一九八六年）、さらに科学におけるモデルの役割については『*The Philosophy of Science An Encyclopedia*』(Taylor & Francis Group, LLC, 2006)の「科学的メタファー」と「科学モデル」の項を参照。またメタファーの認知機能に関しては『*From a Metaphorical Point of View: A Multidisciplinary Approach to the Cognitive Content of Metaphor*』(de Gruyter, 1995, M.Black: *Models and Metaphors*, Cornell University Press, 1962, R.Boyd: “Metaphor and theory Change: What is “metaphor” a metaphor for?”, *Metaphor and Thought*, Cambridge University Press, 2002, p. 481-532, P・リクール：『生きた隠喩』（久米博訳、岩波書店、一九八四）も参照。
- (41) E. Husserl: *Husserliana X*, S.75.
- (42) Vgl. N. Draz: “The rainbow of emotions: At the crossroads of neurobiology and phenomenology”, *Continental Philosophy Review*, Vol.41, Springer Netherlands, 2008, p.237-259.
- (43) このXという表現は誤解を招く危険性が高い。そもそもXがひとつに決まる保証はどこにもなく、物自体のような不可知的実体であってもならない。その限りでX自身は絶えず揺れ動くはずである。しかし、そもそもその「揺れ動き」はいかにして分かるのか。それは、Xの多様なモードが発見され、経験が前進することによってだけである。その中で初めてプログラムは、探究が展開していることがかりを得ることになる。またこのことは、Xと思念がどのように一致するのかといった対応説的な「真理観」とはそもそも関係がない。
- (44) レヴィナスは、レトリックをギリシア的弁論術である「説得の技法」としてのみ理解し、それは「他者が有する返答の自由を買収することである。それがために、レトリックは暴力の最たるもの、言い換えるなら不正なのだ」と切り捨てているが、レヴィナス自らの多言が、そうしたレトリックではないことをどのように吟味するのか。記述に内的な固有経験を吟味する仕組みが構想されない限り、擬似宗教的なレトリックであるという批判をレヴィナス自身が免れないように思われる。E・レヴィナス：『全体性と無限』（合田正人訳、国文社、一九八九）、九三頁以下参照。